

## 第 1 5 期第 2 回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和3年2月2日（火） 13:30～15:30
場所	青森県庁東棟5階 中会議室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 11名  越戸 順子      齋藤 郁子      小寺 将太      吉川 康久  永澤 正己      工藤 貴子      柏谷 至      深作 拓郎  山崎 結子      小笠原 秀樹      岩本 美和</p> <p>《 事務局 》 7名  葛西 浩一（生涯学習課長） 花田 千穂（学校地域連携推進監・課長代理）  大島 義弘（生涯学習課 企画振興グループ 主任社会教育主事）  三浦 博明（生涯学習課 地域連携推進グループ 主任社会教育主事）  佐藤 元伸（総合社会教育センター 教育活動支援課長） 他2名</p>
内容	1 開 会 2 案 件 （1）重点審議事項1「多様な人々のつながりと新しい技術の活用による生涯学習・社会教育の推進について」に係る課題等について （2）その他 3 閉 会
配 付 資 料	次第・青森県生涯学習審議会委員名簿・座席図 〈資料〉 <ol style="list-style-type: none"> <li>1-① 令和2年度社会教育行政の方針と重点</li> <li>② 重点審議事項1に関連する主な令和2年度事業の概要</li> <li>③ 本県以外の都道府県における重点審議事項1に関連する事業・講座の実施状況（令和2年度）</li> <li>2-① 本県の公民館における事業の実施状況について（令和元年度）</li> <li>② 本県及び全国の公民館における重点審議事項1に関連する取組事例</li> <li>3 全国の民間団体による重点審議事項1に関連する取組事例</li> <li>4 「生涯学習に関する世論調査」の概要</li> <li>5 オンライン会議及び研修会の実施状況について</li> <li>6 アンケート調査について（案）</li> <li>7 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール</li> </ol> 〈参考資料〉 <ol style="list-style-type: none"> <li>1 第15期青森県生涯学習審議会への諮問</li> <li>2 第1回会議における意見の整理</li> <li>3 あおもり県民カレッジ実施状況</li> <li>4 学習活動に関する県民の意識について</li> <li>5 本県における公民館事業の状況</li> <li>6 本県公民館における設備の設置状況について</li> <li>7 県民カレッジ&amp;生涯学習情報誌「てのひら」</li> </ol>

## 1 開 会

(内容省略)

## 2 案 件

**会長** 本日は2回目の会議となるが、実質的には最初の会議となる。諮問の内容に沿って、委員の皆さんから御意見を伺い、今後の生涯学習の在り方について検討を進めていきたい。今回の諮問は大きなテーマで、これまでの生涯学習行政の単純な延長では応え切れないと考えているので、これまでにはなかった新しい御意見を数多くいただければと思う。それでは次第に従って、案件（1）重点審議事項1に係る課題等について事務局から説明していただきたい。

(事務局から説明)

**会長** 事務局からの説明で質問があれば御発言いただきたい。

**委員** 県が実施した事業の中で、「若者・女性の学び直しを通じたキャリア形成支援事業」と「若者の社会参加促進事業」の参加者について教えていただきたい。

**事務局** 「若者・女性の学び直しを通じたキャリア形成支援事業」では、キャリアプランニング講座の黒石会場で若者1名、女性2名、三沢会場で女性10名、むつ会場で若者2名、女性4名、フォローアップ研修会では5名参加いただいた。また、「若者の社会参加促進事業」では、取組の一つ目として、県内の3地区において若者団体が地域の課題等を踏まえたモデル事業を企画立案する取組を行った。取組の二つ目としては、ひきこもりやニート等の課題を抱える若者を対象として、自然体験をはじめとする多様な体験活動の機会を提供する取組を県立少年自然の家を会場に実施し、10名が参加した。

**会長** それでは、サブテーマの一つ目「高齢者から子ども・若者まで、全ての県民が生涯を通じて学ぶことができる環境づくり」について御意見をいただきたい。

**委員** 県の取組に限った話ではないが、生涯学習における講座では、参加者集めに苦労している印象を受ける。ビジネス用語では、「B to B」「B to C」という言葉があるが、「B to C」のようなイメージで、とりあえずチラシをつくって個人に呼びかるといったやり方では、人集めに限界があると感じている。そのため、地域に密着して活動している各種協議会や青年会議所のような団体と連携を取りながら取組を進めることによって、ある程度の参加者数を確保できるようになると思う。

**会長** 取組を進める上で、県民一人一人に直接呼びかけることに加え、既存の組織をうまく活用することも人集めの問題を解決する手法の一つになるという御指摘だったかと思う。他にも御意見をいただければと思う。

**委員** 内閣府が実施した調査では、学ばない理由として「時間がない」「仕事が忙しい」などの理由があげられているが、学びたいという意識があれば、時間やお金といった

問題は関係なくなるのではないか。学びの目的をどのように動機付けるかが重要で、先ほどの話の中に青年会議所のことも出てきていたが、個人に呼びかけるだけではなく、地域で自主的に活動している様々な団体やNPOを巻き込んで取組の裾野を広げていくようなことを意識すると、地域にも入れず、それ以前に学びにも関わらない人にも届くようになると思う。また、趣味や教養に関する内容が、学びの入り口になっていることが多いと思うが、学んだことを地域に生かすという段階には、まだハードルがあるように感じている。

**委員** 個人の学びには、周囲の学びに対する意識や環境も重要と考える。私が暮らす地域では、子どもに「お前、勉強して何になる」といったことを平然と言う人もいるという話を聞いたことがある。そういった個人の学びに消極的な人たちに、自身の実益にかなうことなどから学びへの参加につなげることができれば、そういった成功体験の積み重ねが、遠回りかもしれないが、個人の学びを広げる近道になると感じている。

**委員** 内閣府が実施した調査によると、地域活動に参加してみたいと考えている人が約8割いる一方で、学習成果を地域や社会での活動に生かしている（生かせると考えている）人は、約2割にとどまっている。同調査では、地域社会での活動に参加を促す方策として、活動に関する情報提供や活動への参加につながるようなきっかけ作りを挙げている人が多いので、「学びの窓口」のような、まちなかに気軽に立ち寄れる相談場所があれば、個人の学びや地域活動を始めるきっかけにつながると思う。

**委員** 高校生の現状についてお話すると、時間に余裕があり、放課後、地域での様々な活動に参加することができる高校生はかなり少ないと感じている。現在、高校では総合的な探究の時間が設定されているが、その活動の中では地域での多様な活動も行われている。高校生時代の地域での経験が、大人になってから地域活動への参加に大きな影響を与え、将来的な生涯学習への参加につながると考えている。先日、小中学校で学校支援コーディネーターを務めている方から、学校と地域での活動をつなぐことで、生徒たちに多様な地域活動の機会を提供しているという話を伺った。他県の高校では、学校支援コーディネーターを配置している学校もあるが、本県には学校支援コーディネーターを配置している高校はない。学校支援コーディネーターのような仕組みができれば、多様な地域での活動の機会を高校生にさらに提供することができると考えている。

**委員** 皆さんの話を伺いながら、学びの捉え方が重要だと考えていた。個人的には、学びを硬直的にとらえるのではなく、多様で裾野の広いものとして考えている。この会場に来るまでの途中で、病院の中に開設されているフリースペースに立ち寄ったが、そこでは、数人の高齢の方がお茶を飲みながらの会話で情報交換をしていた。他にもプレーパークのような子どもたちの冒険遊び場や、津軽保健生活協同組合の班会での身近な健康に関わる話なども学びの一つだと思う。地域での学びは、社会教育施設のみだけでなく、地域のいたるところで行われていて、そういった生活課題や個人の興味関心からの学びを新しい価値観に結びついているという捉え方が、今回の諮問の「新しい」という部分に関わってくると考えている。

**会長** 学びの捉え方として、学校や公民館など公的なものだけにとどまらず、もっと多様なものが含まれるというのは、今回の審議会でも出発点にすべき議論だと思う。

**会長** ここまでの話を整理させていただくと、一つ目としては、学びの捉え方の問題があるように思う。おそらく生涯学習として提供されている学びの中には、「学校で習うようなことは実社会で役に立たない」「趣味的・教養的なことは学ぶ必要がない」と意識されるものもあり、学びから遠ざかってしまっている状況と、反対に、本当は地域の中に多様な学びがあるのに、それが生涯学習と捉えられてない状況と、両すくみのような状況があるように思う。そのような状況をどのようにクリアするかというのは重要なテーマになりそうである。

また、参加者へのアプローチの仕方としては、県民に広く呼びかけることは、結局、誰にも呼びかけていないこととほぼ一緒になってしまうので、ターゲットを絞った上で既存のネットワークを使う、あるいは、ふらっと来て、気軽に交流できるような場所をつくるなど、学びに誘導するための環境づくりの面も重要だという御指摘をいただいたと思う。

さらにもう一つ別の論点を付け加えさせていただくと、社会的な条件の不利な方にどのように学びの機会を提供するかということも重要なテーマだと考えている。これまでの御意見の中でも、例えば高齢者や障害者、ヤングケアラーの方などの話題が出ていたが、そういった人たちに対する学びの場・機会をどのように提供するかということも重要な視点になると思う。これまであまり取り上げられてこなかった内容だと思うので、可能であれば他地域の事例など、参考になるものを紹介できればいいと考えている。

**会長** それでは、サブテーマの二つ目「学びと活動の循環を促進するための方策」について御意見をいただきたい。

**委員** 現在勤務している小学校の話をさせていただくと、地域とかなり密着した教育活動を進める中で、多くの地域の人たちに協力いただいております、特に盆踊りや郷土芸能、地域学習などの活動で、高齢者に関わってもらえる機会が多くある。生き生きと目を輝かせて話を聞いてくれる小学生を目の前にして、講師を務める高齢者も大きなやりがいを感じていて、小学生に分かりやすく教えるため、御自身でもかなり勉強しているようである。さらに、活動に加わる人も増え、ネットワークが広がっているところもあり、子どもたちの持っている力は大きいと感じている。自分自身が学んだことが次世代につながるということを実感できると、学んだことを価値のあるものとして捉えることができ、やりがいになる。そういった循環を教育活動の中で大事にしていきたいと考えている。

**会長** 高齢者の学びの場でもあり、家庭での学びの成果を還元する場としても小学校は非常に重要な役割を果たしていると思う。

**委員** 学習活動自体は、それがなければ生活ができないといったものではないので、学ぶことや学びの成果の循環を促進させるためには、学習者自身の自主性が重要だと思っている。自主性を引き出す方法としてはいろいろあると思うが、何かやってみたときの気づきをスタート地点にして、そこから自主的に取り組んだものが学習者の土台になると思う。例えば、青森市民であればほとんどが知っているねぶたでも、実際に運営上の何らかの役割を担当してやってもらうと価値観が変わって、自分から率先して違う役割も担当してやるようになる。先ほど、取組を進める際に、内容に応じて既存の団体を巻き込めばよいというお話が出ていたが、対象が高校生や大学生であれば、学校の先生方にも協力いただいて、生徒や学生に参加してもらうということも、活動

に参加するきっかけづくりとしては重要な視点だと思う。生涯学習では、どちらかと言うと積極的な人だけが輝くというよりは、地道な学習者の掘り起こしから始まり、それぞれの気付きからその人に活動が根付いていくという方が、今後の社会全体の大きな力なると考えている。

**会長** 学校と地域での活動をつなぐという点では、可能であれば、他県の学校支援コーディネーターについてももう少し詳しくお話しいただきたい。

**委員** 私が知っている方は、もともと企業で働いていた方で、学校関係の雑誌の編集をしていたと記憶している。学校・企業回りで把握していた学校や企業の要望を学校支援コーディネーターとしてうまく地域とつないで成果を上げられたと聞く。現在の勤務校では、総合的な探究の時間で市役所や地域の皆様のご厚意により多様な地域活動に取り組んでいるが、活動が現在つながりのある範囲に限定されがちである。本県においても、学校支援コーディネーターが配置できれば、生徒たちに提供できる活動の幅が広がると感じている。

**事務局** 学校と地域での活動をつなぐという観点から、地域学校協働活動について説明させていただくと、これまでは学校の環境整備や地域学習などの活動において、地域のボランティアによる支援が中心だったが、現在、文部科学省では、地域全体で子どもたちを育てる取組である地域学校協働活動を進めており、本県でも、市町村教育委員会が中心となって小中学校に地域学校協働本部の設置や地域学校協働活動推進員の配置を進めている。その結果、教職員の異動の影響をあまり受けずに地域での取組を継続して行えることも期待されている。一方、県立学校では、全国的に見ても地域学校協働活動推進員の配置が進んでいない状況である。

**会長** 全国的にも高校には学校と地域活動をつなぐコーディネーターがあまり配置されていないということであれば、逆に全国の先進的な事例を参考に提言していくことを考えてもいいと思う。

**会長** 私からも質問させていただきたい。総合社会教育センターで実施している「パワフルAOMORI！創造塾」について、取組の内容と参加者の卒塾後の活動状況について、教えていただきたい。

**事務局** 「パワフルAOMORI！創造塾」について、簡単に説明させていただくと、地域活動に興味のある方を定員20名で募集し、年間4回程度、1泊2日の日程で講座を開催し、参加者は企画した地域活動を実践する。卒塾生の中には、地域で団体を立ち上げて活動している方も見られ、一例をあげると、身近なところから始めたゴミ拾い活動を県内各地での活動に広げている団体など、多様な活動を実践している。

**会長** 県内にも地域での活動の実践に結びつけている事例があるので、現在行われている活動をブラッシュアップできれば、さらに新しい活動のヒントが見えてくると期待している。ほかにも意見があればお願いしたい。

**委員** 私は地域の小学校のコミュニティースクールのメンバーとして活動したことがあり、アンケートで学校が支援してもらいたい内容を把握した上で、種植えや学区探検、ス

キー実習などで、子どもたちの活動のサポートをした。地域の中には、実業高校があるので、個人的には農業などの活動で高校生も一緒に活動できればいいと考えている。また、その小学校には近くに公民館がないかわりに、移動公民館という形で地域の人たちが集まって講座を行っているので、地域での学習の場は工夫次第でいろいろつくることができると考えている。

**委員** 生涯学習の運営面での話をさせていただくと、講座を企画しても参加者が集まらなければ意味がないので、高齢者に呼びかけることが多くなる。そうすると、同じ人たちが毎回集まることが多くなり、新しい人たちが入りづらい雰囲気をつくることになる。若い人たちをどのようにして生涯学習に巻き込むかは、大きな課題だと考えている。

**委員** 事例を一つ紹介させていただくと、成功事例としてよく耳にする島根県立隠岐島前高校の高校魅力化プロジェクトでは、島外の人材がコーディネーターとして取組を進めているので、学校支援コーディネーターの役割と重なるところがあると思う。また、以前、コーディネーターを務めたことがあるが、地域や企業、学校、若者などをつなぐ取組を進める上で、人集めにはかなり苦労した。そういった経験もあり、参加者が参加者を呼んでいくようなつながりができればと考えている。個人的な印象としては、青森県は人情に厚いところがあると感じていて、「あの人に参加しているから私も参加しよう」というようなつながりの連鎖を生み出せるような下地を地域につくっていければいい。地域での生涯学習の裾野を広げることにもつながる話だと思う。

**委員** 私が暮らしている町の生涯学習課が実施している高齢者対象の取組では、町内全域から多くの参加者が見られ、生き生きと活動している。スーパーでの買い物や病院に薬をもらいに行くなど生活に密着した内容を実施しているが、多くの参加者がワクワクしながら楽しんで参加している。生涯学習においても、同様のワクワク感を引き出すことは重要な視点だと考えている。また、各学校では多様な体験活動が年間通じて数多く実施されているが、やったことがどれだけ子どもたちの中に残っているかは、大変疑問に感じている。学年間や教科間で、一つ一つの体験活動をつなげて、子どもたちの中に深く印象付けられるようにできればよいと考えている。さらに、地域づくり団体の活動では、地元の高校を巻き込んでかなり活発な活動を行っている。キャリア教育的な取組になるが、そのような地域で活躍している人たちの話を聞く機会を小中学校で提供することで、子どもたちの地域活動に参加する意識を高めることができると考えている。

**会長** サブテーマの②について整理させていただくと、学びの場や学びの成果を生かす場は地域の様々なところにあることを確認できたと思う。一方で、コーディネーターの負担の解消や、一つ一つの活動を点で終わらせないようにすること、活動への新規の参加者を増やすこと、趣味としての生涯学習と活動としての生涯学習の間のハードルをいかにして超えるかといった課題について、今後さらに議論する必要がある。

(休憩)

**会長** 再開させていただく。三つ目のテーマ「『オンラインによる学び』等の新しい技術の活用」について、まずは事務局から説明していただきたい。

## (事務局から説明)

**会長** それでは、委員の皆さんから御意見があればお願いしたい。

**委員** 私は社会活動の一環で、インターネットラジオを配信する活動を行っている。今月もオンラインで講座を開催する予定で、学びを提供する側も受ける側もオンラインを活用できるツールをいかに使いこなすかは重要なポイントになっている。先ほど、事務局から体の不自由な方が受講できる機会を設けることができたという話があったが、それまで参加することができなかつた人に受講できる機会を提供できたことは大変意義深いことだと思う。一方で、高齢者を対象とした講座の講師を務めたことがあるが、そこでは学ぶこと以上に集まること自体が参加者にとっては重要な要素になっていて、対面による学びの良さについても改めて見直す必要がある。オンライン技術の活用については、トライ&エラーを繰り返しながら、マニュアル化やバージョンアップを図ることや高齢者のデジタルディバイドの解消といった問題もある。高齢者の中には、ユーチューバーをやっている人もいるので、高齢者同士で学び合える機会があってもいいと思う。

**委員** 新しい技術の活用をどのように学ぶかということが、おそらく生涯学習につながってくると思う。キーワードの中には命を守るということも入っているが、防災などの観点から考えるとICT技術の活用は重要である。県の取組で障害者と高齢者を対象にしたICT技術を学ぶ講座があるので、事例の一つとして今後の会議で紹介いただければと思う。

**委員** 年越しから元日にかけて、自分の子どもたちとオンライン飲み会を初めてやってみたが、慣れてしまえば思っていた以上に簡単に遠くの人とコミュニケーションをとることができることを実感できた。学校では、GIGAスクール構想が前倒しになってオンラインによる学びがさらに身近になる。大事なことは、そういった新しい技術の先にどのような学びを準備するのかということだと思う。

**委員** 現在勤務している大学では、オンラインでの授業も行っている。また、講師を依頼された公民館研修では、職員を対象にオンラインでの講座運営についての研修を行うことを予定している。現在の学びにおいて、新しい技術の活用は重要な要素となっているが、マナーを含めてスキルの向上を図る必要があると思う。また、Wi-Fi環境の整備においては、セキュリティーの問題をどのようにマネジメントするかが大きな課題である。現在、オンラインでの学びが主流になっているが、情報を伝えるということでは、紙ベースのものやラジオなどの音声ツールも見直す必要があると思う。

**会長** ここまでの話を整理させていただくと、新しい技術の活用については、遠方の人や障害のある人の参加の面でいくつかの障壁を軽減できることが大きなメリットとして挙げられると思う。その一方で、機器を使いこなすための技術の習得やマナーやモラル、物品やWi-Fi環境の整備といったことが課題として挙げられると思う。私からも一つ意見を加えさせていただくと、新しい技術が持っている双方向性の活用ということも重要な視点だと思う。例えば、参加者同士や講師との話で議論する場を提供することは、おそらく今後の生涯学習においては必要になると思うので、今後、議論できればいいと思いながらお話を伺っていた。

会長 それでは、案件（２）その他に入る。まずは事務局からアンケート調査と今後のスケジュールについて説明していただきたい。

（事務局から説明）

会長 事務局から説明があったように、実地調査については、委員の皆さんを対象としたアンケート調査を踏まえた上で、次回の会議で調査先についても検討することとする。

### 3 閉会

（内容省略）